

# 池田古墳 発掘調査 現地説明会資料

平成22年11月20日(土)  
朝来市教育委員会  
埋蔵文化財センター

## 1、はじめに

市内和田山町平野にある池田古墳は、但馬でもっとも大きく、兵庫県でも4番目の規模をほこる前方後円墳です。昭和46年(1971)の調査で、葺石・埴輪・周濠を備えもつものであることが確かめられました。朝来市教育委員会では、このような但馬地域を代表する古墳の大きさや形などの基礎データを得るために、平成18年度から継続して国庫補助事業の発掘調査を実施しています。

## 2、これまでの調査

### 【朝来市の調査】

これまで古墳の後円部側を多く調査しており、東側(京都側)と西側(鳥取側)において古墳の墳丘基底部(埴裾)を示す葺石と造り出し、第1段めテラスの埴輪列の位置やその概要が明らかになってきています。また、前方部側は土地の制約もあって、調査できる範囲が限られていますが、昨年度の調査では古墳の周りにつくられた周濠の端の位置を確認しています。出土した遺物の大部分は円筒埴輪ですが、中には水鳥形や家形・盾形・壺形・蓋(きぬがさ)形などの形象埴輪があります。

### 【兵庫県立考古博物館の調査】

平成20・21年度の調査では、前方部両側から周濠に伸びる渡土堤(わたりどて)と造り出しが明らかになりました。東側の葺石付近からは水鳥形埴輪が14体出土しています。朝来市教委の調査分を含めると15体となり、1つの古墳からの出土数としては誉田御廟山古墳(応神天皇陵古墳)と並んで全国で最多になります。

## 3、調査の概要

後円部北側の周濠に3ヶ所(1・3・4トレンチ)、墳頂に1ヶ所(2トレンチ)の調査区を設定して調査しました。その結果、1トレンチにおいて、墳丘基底部を示す葺石の遺構を確認しました。

### 【1トレンチ】

- ・ 墳丘基底部(古墳の最も外側の縁にあたる部分)を示す葺石を確認しました。葺石は幅約2m、高さ約0.8mの規模で確認できます。葺石は主として川石を使用してつくっており、また一回り大きい石を根石としてその上に石を重ねて構築しています。葺石の内側(古墳側)には平坦面があり、もともとは埴輪が立てられていたと考えられますが、全て割れてバラバラの状態出土しており、立てられた元の位置を保ったまま出土したも

のではありませんでした。

- ・ 葺石の外側（古墳とは反対側）は周濠です。この周濠はもともと水を湛えていたと考えられています。

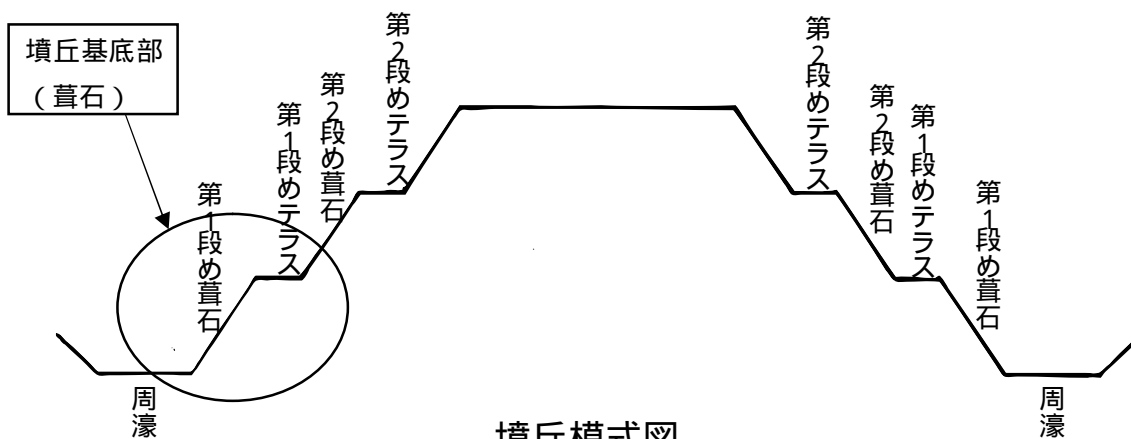
【2トレンチ】埋葬施設等の残存状況を確認するために、設定したトレンチです。

- ・ 後世に土地が大きく改変されており、古墳に伴う遺構等は確認することはできませんでした。なお、現在はすでに埋め戻しています。

【3・4トレンチ】古墳の北側の周濠内に設定したトレンチです。

- ・ この2つの調査区は古墳から派生する渡土堤の存在を確認するために設定しましたが、確認されませんでした。平成20年・21年度の調査で確認された、前方部側に存在する渡土堤が、後円部側に存在するかどうかは現段階では定かではありません。

【出土した遺物】今回の調査で出土した遺物の大部分は埴輪で、ほかには周濠の埋土から、少し時代の新しい須恵器や土師器が少量見つかっています。埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪・盾形埴輪が見つかっています。



墳丘模式図

で囲った部分が今回確認した箇所です。

#### 4、まとめ

今回の調査では、墳丘基底部の位置を確認することができました。墳丘の基底部を示す葺石は、どの調査地点でも確認されており、その遺存状態は非常に良好であると言えます。出土した埴輪から、池田古墳がつくられた時期は5世紀初め頃、史跡茶すり山古墳よりも古いと考えられます。

このように継続して調査を行って得られたデータは少しずつ増えてきました。今回は古墳の墳頂部をわずかながら調査しましたが、埋葬施設に関する情報は得ることはできませんでした。しかし、周囲の調査の成果を集成して検討を重ねると、造られた当時の池田古墳の姿を想定することが可能になります。

国庫補助事業の調査もあと1年となりました。古墳周辺も宅地がすすみ、調査できる場所も限られています。地元の皆さんにご理解とご協力を得て、データ収集を進めていきたいと思っております。



調査区全景



1トレンチ墳丘基底部の葺石のようす

